

厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）
分担研究報告書

地域在住の独居認知症高齢者の家族支援に関する研究

研究分担者 涌井智子 東京都健康長寿医療センター研究所・研究員
研究協力者 大久保豪 BMS 横浜・立命館大学・客員協力研究員
研究協力者 関野明子 東京都健康長寿医療センター研究所・非常勤研究員
研究協力者 中山莉子 東京都健康長寿医療センター研究所・非常勤研究員
研究代表者 栗田主一 東京都健康長寿医療センター研究所・副所長

研究要旨：本研究の目的は地域在住の独居認知症高齢者の家族が抱える課題を明らかにするため、研究 1: 独居高齢者の家族の介護に関する文献調査を行い既存の関連研究の動向を明らかにすること、研究 2: 認知症高齢者の家族を対象にインタビュー調査を行い認知症独居高齢者の家族が支援・介護を提供する上での課題を明らかにすることとした。選定された 9 件の量的・質的文献のスコーピングレビューに加えて、27 名の認知症を持つ高齢者の家族に対する半構造化インタビュー調査を実施した。インタビュー調査の結果からは【距離がつくる不安】【生活が別である弊害】【求められる別居介護の正当化】が抽出され、これらの一部は先行研究の精査によって抽出された【独居高齢者の安全や Well-being を確認することの難しさ】【(家族が感じる) 別居ゆえのプレッシャー】といった別居による支援・介護提供の難しさと共通していた。またこれらに加えて、【生活が別である弊害】として、「貴重品・重要書類の場所がわからない」「社会資源がわからない」といった新たな課題が抽出され、支援ニーズ検討の必要性が示唆された。

A. 研究目的

本研究の目的は、地域在住の独居認知症高齢者の家族が抱える課題を明らかにするため、研究 1: 独居高齢者の家族の介護に関する文献調査を行い既存の関連研究の動向を明らかにすること、研究 2: 認知症高齢者の家族を対象にインタビュー調査を行い認知症独居高齢者の家族が支援・介護を提供する上での課題を明らかにすることとした。

B. 研究方法

研究 1. スコーピングレビュー

2022 年 4 月～2022 年 8 月までの期間において、Pubmed, Web of Science, PsychNet を用いて独居高齢者の家族に関する文献検索を行った。独居高齢者の別居介護に「認知症」という単語を加えることにより、該当文献が極端に少なくなることに加えて認知症の独居高齢者の家族支援に関する文献がほとんど見られない状況を鑑み、本スコーピングレビューにおいては Dementia を除き、

独居高齢者の家族支援に関するレビューとした。

検索式は「(("living alone" OR solitary) AND family) OR ("distance care" OR ("live-out" OR "non-coresident") AND care))」とした。Pubmedで3493件、Web of Scienceで4036件、PsychNETで1087件の文献がヒットした。加えて、33件の関連する引用文献が検索され、重複2321件を除く6328件をスクリーニングの対象論文とした。

研究2: 家族介護者へのインタビュー調査

2022年4月から2023年3月での期間において、機縁法、および東京都健康長寿医療センター病院内において、認知症高齢者の家族に対するインタビュー調査協力者を募集する案内を掲示し調査協力者を募った。最終的に、認知症高齢者の生活支援または介護を担う家族介護者27名に対し、計38回のインタビューを行い（介護者一人につき1~4回）、本研究の解析対象とした。

（倫理面への配慮）

スコーピングレビューに際しては、その研究の手法上倫理委員会の申請をしていない。一方、家族介護者へのインタビュー調査の実施に際しては、東京都健康長寿医療センターの研究倫理委員会の審査・承認を経て研究を実施した。

C. 研究結果

研究1: スコーピングレビュー

対象論文6328件において、除外基準を以下とした。要介護者が子どもや64歳以下に限定されている場合（要介護者の年齢不詳を含む）、要介護高齢者と介護者の居住形態に触れておらず要介護高齢者が独居かどう

か明確でない場合とし、これらの除外基準に該当する6282件を対象から除外し、46件の論文を詳細に検討した。図1に文献レビュー選択基準を記載する。

46件の対象論文を詳細に検討したところ、9件の量的・質的論文が選定された。選定された論文とその研究方法の内訳は表1に示す。

9件の対象論文はアメリカ、ブラジル、台湾、スペイン、スウェーデン、英国、カナダ、日本からの報告であり、5件の横断による質問紙調査および4件のインタビュー調査に基づいた研究報告であった。

独居高齢者を支える支援や介護提供上の家族・介護者が抱える課題について、これらの先行研究を整理したところ、32の課題に関連するコードを抽出した。例えば、【独居高齢者の安全やWell-beingを確認することの難しさ】【(家族が感じる)別居ゆえのプレッシャー】【独居高齢者の変化の理由がわからないこと】といった別居介護による支援・介護提供の難しさに加えて、別居で支援や介護を提供する上での【経済的困難（交通費、ホテル代、入院費など）】や、【介護者と本人の関係性の維持の難しさ】などが課題として挙げられていた。

研究2: 家族介護者へのインタビュー調査

半構造化による家族介護者へのインタビュー調査データの解析から、認知症を持つ高齢者に別居で介護や支援を提供する家族の抱える課題として以下の3つのカテゴリー【距離がつくる不安】【生活が別である弊害】【求められる別居介護の正当化】とそれぞれのサブカテゴリーが抽出された。

1. 【距離がつくる不安】

同居ではない、つまり認知症の要介護高齢者との距離が存在することによって、別居の家族は、「今何が起きているかわからない」状況にしばしば直面していた。別居による介護を埋める様々な方法（定期的な電話連絡、LINEなどでの連絡方法、度々の訪問）を構築しても、認知症を持つ高齢者本人が、家族にとっては必要と思う情報を意図的に隠したり、或いは必要と思わずに伝えないといった状況により、家族が状況を把握できないと感じていた。また、そのように十分に状況を把握できないという経験を持つことが、家族に「もしかしたら、（認知症を持つ高齢者が）また状況をすべて話してくれていないのではないか」という不安を生じさせていた。

“ただやっぱ離れているというのがすごくハンデだなと思うのは、ちょっと電話で話すとか、ましてやLINEでのやりとりなんかは全然分からないんです、ほんとのところの姿が、取り繕えるし。”(YS : 53 歳娘—82 歳母)

加えて、別居という距離が問題解決の発見を遅らせ「場に行かなければわからない課題」、対応策が後手になる状況「後手になる対応」を生んでいた。定期的に本人をはじめとしたさまざまな関わりを持つ対象に対して、様子の確認をしているつもりであっても、要介護高齢者の生活において何らかの支援が必要な課題が生じたことの把握は、その場に行ってでしか把握できないと感じていた。

“舅が(定期的に)お風呂入っているって(私たちに)言うから放置してたら、やっぱ

り実際は入ってなかった。トイレの失敗も増えてすごい悪臭がしてた時期があったんです。”(MN : 57 歳嫁—94 歳義父)

そして、何らかの理由で本人と連絡が取れない状況が生じたときの不安「連絡が取れない不安」は別居による支援・介護継続上の大きな課題となっていた。

“電話が鳴らないんです。受話器が外れてるのか、でも、それを確かめに行くすべが無くて。でも夜だから、地域包括の人とか誰もいないし。誰にも確認にも行ってもらえないから。電車で行くよりかは、車で行ったほうが早く着けるので。私、運転が若干苦手なので、父に運転をしてもらおうんですけど。”(TN : 40 歳娘—78 歳母)

2. 【生活が別である弊害】

生活の場が異なることによって、「貴重品・重要書類の場所がわからない」「社会資源がわからない」といった介護提供上の課題に加えて、「求められるダブルの家事」といったサブカテゴリーが挙げられた。

例えば、もともと生活が別であったために貴重品や書類の場所をお互いに共有していない状況に加えて、要介護高齢者の認知症状故に貴重品などを隠してしまう行動パターンが加わり、別居の家族が「貴重品・重要書類の場所を把握することが難しい」といった状況を生じさせていた。

また、生活する場所が異なると「社会資源がわからず」必要な支援にたどり着くのに時間を要したり、受援のための労力を費やさざるを得ない状況が生じていた。

“ゴミ箱システムみたいなのをあつたばかったんですけど、私は聞いた時は特に誰

も言ってなかったから、私がたぶん調べればあったんだと思って。後から、あーそうだったんだと思って。だったらそんな汚いまま虫が湧いちゃうこともなくできてたんだと思ったりとかして。家族もちゃんと調べなきゃいけなかったという反省はあるんですけど。”(TU : 52 歳娘—84 歳母)

また、別居による介護は介護の生活そのものだけでなく介護者自身の生活に対して、管理する「生活が二つある」という状況を生じさせ、おろそかになってしまう片方の生活の状況から、別居での介護を継続する生活に不安を抱いていた。

“うちの母のご飯は何とかいろいろ工夫して、いろいろ作るけれど、家に帰って自分のご飯や自分と娘とのあれがだんだん適当になってきて、適当になるだけじゃなくて、ほんとにいつまで続くんだらうって。”

(DB : 60 歳娘—90 歳母)

3. 【求められる別居介護の正当化】

要介護高齢者の潜在的希望や文化的規範、介護者自身の配偶者らの希望などを考慮し、別居の介護を継続することに対して、家族介護者自らが「自分自身への別居介護継続の正当化」を行っている側面がみられた。

“多分、本当に同居をすることが一番いいんだと思うんです。母は昔の人なので、同居するのが当たり前な人たちだったものなんです。地元の親戚はみんな同居しているという状況になって。うちだけ、兄が転勤族だったり、私もちょっと違うところに嫁いでしまったりっていうのがあって、結局、同居ができなかった。”(TU : 52 歳娘—84 歳母)

”私個人の意見では同居したいですけど。夫のこと考えると、ちょっと難しいかもしれない。だからせいぜい隣に住むとかなのかなって感じです。”(YS : 53 歳娘-82 歳母)

これらの「自分自身への別居介護継続の正当化」は、親族や遠戚、ケアマネジャーや介護スタッフから求められる同居介護ありきといった「他者からの同居介護へのプレッシャー」も一端となっていた。

D. 考察

研究1 : スコーピングレビュー

本研究により、独居高齢者の家族に焦点をあてた研究が極めて限定的であることが明らかとなった。

抽出されたこれまでの課題としては「要介護高齢者の安全や Well-being を確認することの難しさ」や「不安要素を隠そうとする要介護高齢者」の状況(White et al., 2020)、「変化の理由がわからない」(Kitamura et al., 2019)等が挙げられ、これらの課題は別居介護或いは、要介護高齢者が独居による特徴と考えられた。一方で、要介護高齢者本人との関係性維持の難しさや要介護高齢者本人の希望や意思を把握することの難しさ、要介護高齢者と家族間の意思や希望における折り合いのつけ方(Molina-Mula et al., 2019; Perseguino et al., 2017; Roff et al., 2007)等は同居の介護にも通じる介護を担う家族の葛藤と考えられた。本スコーピングレビューにおいて、同居介護と共通する、或いは別居特有の課題が抽出されたことは意義が大きい。

これまでの先行研究においては、要介護者の「独居」は変数の一つとして考慮されて

いる場合があるが、必ずしも独居高齢者の家族の状況に焦点化されているわけではない。その一方で、認知症独居高齢者の支援・介護を担う家族介護者には同居による家族介護者とは異なる負担や課題があると考えられ(Kitamura et al., 2019)、今後の研究蓄積の必要性が待たれる。特に我が国においては、従来同居による介護が中心であった。介護が必要になった後に独居で支援や介護を受ける高齢者の増加は、介護保険制度の導入後である(涌井 智子, 2020)。介護保険制度の導入、および家族観や介護に対する人々の考え方が従来と変化してきている状況を鑑み、これらの介護を担う別居介護者が増加すると考えられ、今後は認知症を持ちながら生活を継続する独居高齢者への支援・介護がどうあるべきか、今後の研究知見の蓄積が待たれるところである。

なお、検索式の選定において「介護者 (caregiver や carer)」だけでなく「家族」を入れた理由としては(認知症)高齢者の独居での生活を継続する場合に、家族が必ずしも手段的介護を提供する「介護者」だけとは限らず、見守りといった家族らが必ずしも「介護」と認識しない支援を提供している可能性があることを考慮し、「家族 (Family)」を検索式に含むこととした。これは Kitamura et al. (2019)の研究で、調査対象選定基準に「家族自身が『介護者』と認識していること」として介護者を定義づけていることから推察されるように、介護者の定義づけることの難しさが反映されている。先行研究においても、支援や介護を提供する「介護者」の定義はばらつきがみられ、今後の対象者の定義づけの際に考慮することの重要性についてここで触れておく。

研究 2: インタビュー調査

認知症高齢者の生活支援を担う家族介護者に対するインタビュー調査からは、別居介護特有の【距離がつくる不安】【生活が別である弊害】、そして家族が直面している【求められる別居介護の正当化】の状況が明らかになった。

家族らは様々な方法で要介護高齢者本人の状況を把握する手段(度重なる電話での連絡、LINE、度々の訪問など)を構築し、別居による介護を継続しようと試みる一方で、家族に何らかの緊急時の問題が生じる状況をリアルタイムで把握することができないことへの不安や葛藤、そして様々な方法での確認手段が功を奏さないことへの消耗感を抱えていた。これらの状況は先行研究の「独居高齢者の安全やウェルビーイングをチェックすることの難しさ」や「不安要素を隠そうとする高齢者本人」(White et al., 2020)と同様の状況であった。また、遠隔での把握が難しく、結局のところ何らかの課題を把握できることは要介護高齢者を訪問した際であり、対応が後手になる、或いは訪問した時に対応を求められることも先行研究と同様の結果であった(White et al., 2020)。

これらの状況を鑑みると、特に認知症独居高齢者の場合には、要介護高齢者から提供される情報が限定される可能性が考えられ、遠隔での見守り支援や要介護高齢者の近所における見守りネットワークの構築が有用であると考えられた。遠隔での見守りはリアルタイムで状況が把握できる可能性を作り出す一方で、やはり直接的な支援あるいは確認の必要性があり、それを実現するためにも要介護高齢者の近所における見

守りネットワーク支援の構築という両輪が必要であると考えられた。

E. 結論と今後の課題

本研究の実施により、地域在住の独居高齢者の家族が抱える課題についての先行研究の精査、および認知症独居高齢者の家族が抱える課題がインタビュー調査を通して明らかとなった。インタビュー調査から明らかになった【距離がつくる不安】や【生活が別である弊害】としての生活が二つになってしまう介護者自身の生活影響に加えて「貴重品・重要書類の場所がわからない」「社会資源がわからない」といった新たな課題も抽出され、今後の支援ニーズ検討の必要性が示唆された。

F. 研究発表

学会発表

- 1 関野明子, 涌井智子. (2022). COVID-19 流行下における別居介護継続に寄与する不安要因に関する質的研究. 日本老年社会科学会第 64 回大会. 2022 年 7 月 2-3 日, 2022.
- 2 涌井智子, 中山莉子, 石崎達郎, 栗田主一. (2022). 認知症独居高齢者の別居介護にかかる課題に関する文献研究. 日本認知症ケア学会第 23 回大会. Web 開催. 2022 年 6 月 18 日-9 月 30 日, 2022.

G. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む.)

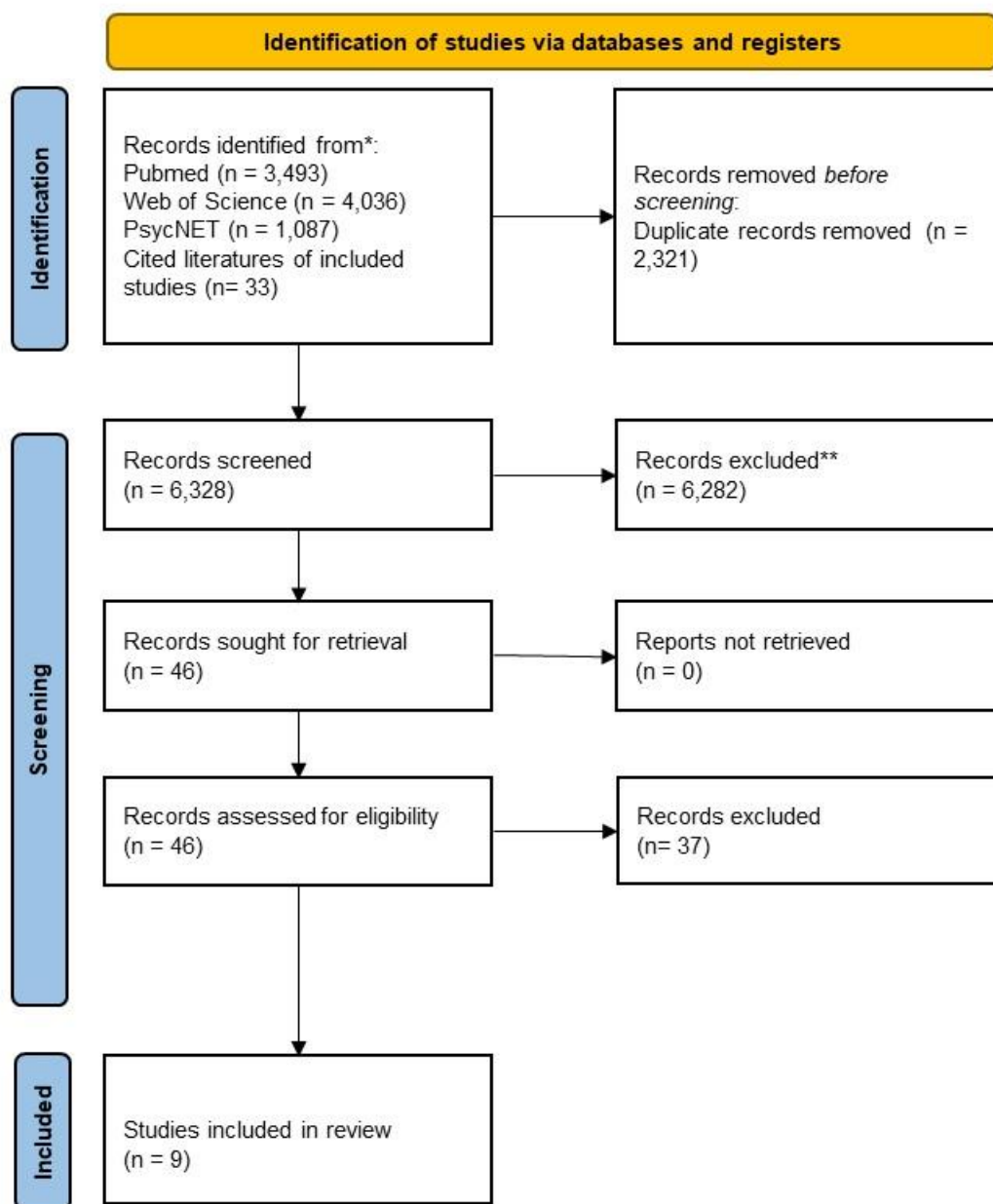
1. 特許取得
該当なし
2. 実用新案登録
該当なし
3. その他
該当なし

Reference

- Chen, M. C., Kao, C. W., Chiu, Y. L., Lin, T. Y., Tsai, Y. T., Jian, Y. Z., Tzeng, Y. M., Lin, F. G., Hwang, S. L., Li, S. R., & Kao, S. (2017). Effects of home-based long-term care services on caregiver health according to age. *Health Qual Life Outcomes*, 15(1), 208. <https://doi.org/10.1186/s12955-017-0786-6>
- Kitamura, T., Tanimoto, C., Oe, S., Kitamura, M., & Hino, S. (2019). Familial caregivers' experiences with home-visit nursing for persons with dementia who live alone. *Psychogeriatrics*, 19(1), 3-9. <https://doi.org/10.1111/psyg.12352>
- Lee, A. A., Aikens, J. E., Janevic, M. R., Rosland, A. M., & Piette, J. D. (2020). Functional support and burden among out-of-home supporters of heart failure patients with and without depression. *Health Psychology*, 39(1), 29-36. <https://doi.org/10.1037/hea0000802>
- Li, L., & Wister, A. (2021). Geographic distance and social isolation among family care-givers providing care to older adults in Canada. *Ageing and Society*, 43(2), 298-323. <https://doi.org/10.1017/s0144686x2100060x>
- Milberg, A., Liljeroos, M., Wahlberg, R., & Krevers, B. (2020). Sense of support within the family: a cross-sectional study of family members in palliative

- home care. *BMC Palliat Care*, 19(1), 120. <https://doi.org/10.1186/s12904-020-00623-z>
- Molina-Mula, J., Gallo-Estrada, J., & Miquel-Novajra, A. (2019). Attitudes and beliefs of Spanish families regarding their family members aged 75 years and over who live alone: a qualitative study. *BMJ Open*, 9(4), e025547. <https://doi.org/10.1136/bmjopen-2018-025547>
- Perseguino, M. G., Horta, A. L., & Ribeiro, C. A. (2017). The family in face of the elderly's reality of living alone. *Revista Brasileira de Enfermagem*, 70(2), 235-241. <https://doi.org/10.1590/0034-7167-2016-0398>
- Roff, L. L., Martin, S. S., Jennings, L. K., Parker, M. W., & Harmon, D. K. (2007). Long Distance Parental Caregivers' Experiences with Siblings: A Qualitative Study. *Qualitative Social Work*, 6(3), 315-334. <https://doi.org/10.1177/1473325007080404>
- White, C., Wray, J., & Whitfield, C. (2020). 'A fifty mile round trip to change a lightbulb': An exploratory study of carers' experiences of providing help, care and support to families and friends from a distance. *Health Soc Care Community*, 28(5), 1632-1642. <https://doi.org/10.1111/hsc.12988>
- 涌井 智子. (2020). 国民生活基礎調査からみる独居高齢者のケアの実態と今後への示唆 (特集 一人暮らしの認知症高齢者). *老年精神医学雑誌*, 31(5), 467-473.

PRISMA 2020 flow diagram for new systematic reviews which included searches of databases and registers only



*Consider, if feasible to do so, reporting the number of records identified from each database or register searched (rather than the total number across all databases/registers).

**If automation tools were used, indicate how many records were excluded by a human and how many were excluded by automation tools.

図1 文献レビュー選択フロー

表 1 Characteristics of the selected studies

Authors and year of publication	Aims	Design	Location	Study population	Data collection period
Roff <i>et al.</i> , 2007	To address aspects of caregiving including: coordination of care, division of labor, distant siblings' views of caregiving activities, and caregiving and sibling relationships	Phenomenological study using interviews Content, context, and comparative approaches of interview transcripts	United States of America	Long-distance caregivers with siblings (n = 22) from associate professors or full professors in a public university in southeastern United States of America Inclusion criteria providing care to elderly parents (Care included regular, tangible instrumental assistance, emotional support, advice and reassurance.) living at least one hour's travel time from the parents	Uncertain
Persequino <i>et al.</i> , 2017	TO understand the family dynamics in face of the reality of the elderly living alone	Qualitative study using interviews Thematic analysis of interview transcripts	Brazil	Families of the elderly living alone (n = 6) inclusion criteria of the elderly living alone age greater than 80 years living alone for more than two years living in the city of São Paulo, having relatives living in the same city or nearby	Uncertain
Chen <i>et al.</i> , 2017	To examine whether the use of home-based LTC services is associated with the health of elderly and younger caregivers, and	Cross-sectional questionnaire survey	Taiwan	Participants: pairs of caregivers and care recipients (number of pairs = 598, response rate: 60.8%)	September 2012 to January 2013

	compared the factors related to caregivers' health between both age groups				
Molina-Mula <i>et al.</i> , 2019	to assess the attitudes and beliefs of Spanish families regarding their elderly family members aged 75 years and over who live alone	Qualitative study using group discussion	Spain	Participants: family members of the elderly living alone (n = 33) Inclusion criteria of the elderly living alone aged 75 years and over living alone in Mallorca, Spain	Uncertain
Milberg <i>et al.</i> , 2020	To study which factors are associated with family members' sense of support within the closest family in the palliative home care context, and to develop a model that predicts their sense of such support	Cross-sectional questionnaire survey	Sweden Recruited from 3 specialised palliative home care units and 3 primary care-based palliative home care units	Participants: family members of patients currently receiving palliative home care (n = 209) care recipients, who live alone were 98.	Uncertain

<p>White <i>et al.</i>, 2020</p>	<p>To understand distance caring in the UK What are the experiences? What care activities do they undertake? What difficulties, challenges, rewards and satisfactionso do they experience?</p>	<p>Cross-sectional questionnaire survey</p>	<p>United Kingdom</p>	<p>Participants: carers to families and friends from a distance (n = 128) Inclusion criteria: Were aged 18 years or over Cared for another adult Both lived in the UK, separated by distances necessitating travel time of one or more hours (each way) when visiting Had provided care and support from a distance during the previous 2 years.</p>	<p>April-November 2017</p>
<p>Lee <i>et al.</i>, 2020</p>	<p>To examine whether HF patients with depression received more or less assistance from CPs living outside their home</p>	<p>Cross-sectional questionnaire survey</p>	<p>USA</p>	<p>Recruited from VA outpatient clinics Inclusion criteria of patients 1) a diagnosis of congestive heart failure with an ejection fraction of <40% 2) a New York Heart Association symptom classification of II or III 3) at least one VA primary care visit in the past 12-months 4) speak English Inclusion criteria of care partners ("CarePartner") 1) individuals with the highest total functional support score on the Norbeck Social Support Questionnaire or</p>	<p>June 2009 and January 2012</p>

				2) specifically requested by patients as their CarePartner	
Li <i>et al.</i> , 2021	To examine the relationship between geographic distance and CSI, including the interaction between geographic distance and care-giving intensity for caregiver social isolation	Cross-sectional questionnaire survey (2012 Canadian General Social Survey)	Canada	Family caregivers to ageing people (n = 2,881) inclusion criteria: 1) the main care recipients of participants was aged 65 years and over who resided in a private home 2) participants were still providing care when the survey was conducted 3) the survey was completed with a non-proxy interview	From 2012 Canada General Social Survey:

<p>Kitamura <i>et al.</i>, 2019</p>	<p>To assess the experiences and perceptions of dementia care before and after implementation of HVN in persons with dementia who lived alone.</p>	<p>Qualitative research using semi-structured interviews</p>	<p>Japan</p>	<p>Family caregivers of older adults with dementia who live alone (n = 5)</p> <p>Inclusion criteria</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) a biological or non-biological adult family member 2) gave unpaid support to persons with dementia who both lived alone in their own home and regularly visited the hospital while having received home-visit nursing for more than 12 months 3) recognized their role as that of family caregiver 4) lived within 30 minutes of the recipient by car 5) had face-to-face contact with the recipient at least twice per week 	<p>June and July of 2016</p>
-------------------------------------	--	--	--------------	---	------------------------------